

英語教育におけるMETHODの意味

広島大学大学院 岡 秀 夫

英語教育における主要な用語の一つであるmethodは非常に複雑・多岐な体系を有するものであるにも拘らず、その用法はまちまちで統一性に欠けている。それ故に、その用法を綿密に考察し、意味を多少とも論理的に組織立て、現状の混乱を減少する必要が生じて来るのは当然であろう。

まず、英語教育史を一べつすると多数のmethodが乱立しているが、「何々Method」と言う具合にmethodの前につけられた修飾語は、一体methodに関して我々に何を告げるのであろうか。MackeyがDirect Methodに言及して、「Direct Methodは単に言語が如何に提示されるべきかを告げるのみで、何が・いつ教えられるべきかに関しては何も語らない。実際Direct Methodには本質的にPhonetic MethodやNatural Methodと異なる所はない。Direct Method, Natural Method, Oral Methodなどの用語は複雑な問題の単なる一面に限定して、その面だけが重大であるかのような推論をするからして、不明瞭で不十分なものにならざるを得ない。(1)」と指摘している如く、「何々Method」と言った場合、それは表層的にはmethodの前につけられた修飾語により規定され、単に顕著な一面的特徴を強調するの過ぎない。従って、それは他と区別するための便宜的な色彩が濃く、示差的な一面的特徴によって内容全体をおおうのは不可能である。一方、実質・内容においては相入れない対立的なものではなく、重複的な部分が多いため、それらの間に明確な境界線を画すことは極めて困難となる。また多くのmethodは言語教育の持つ複雑で広範囲な体系の中の或る特定な側面に限定するので、methodによりカバーされる領域の差異が生じ、共通の体系を欠く結果となる。

このような不統一・混乱の中からmethodの実体分析に進み、methodの構成要素と領域を導き出さねばならない。その観点から、Anthonyに基きmethodと、それに関連性の深い用語approach, techniqueとを比較・検討する。「approach, method, techniqueは階層的であり、種々のtechniqueは或る特定のmethodを実施するものであり、更にそのmethodは或る特定のapproachと合致している。approachとは言語の本質と言語教授・学習の本質とに関した一組の相関的な仮説であり、公理のようなもので、教えられる材料の本質を描き出し、或る見地・原理を述べる。methodとは言語材料を順序正しく提示するための全般的計画であり、そのいかなる部分も或る選ばれたapproachに矛盾せず、全てがそれに基いている。approachが公理的であるのに対し、methodは指導過程に関する。techniqueとは教室で実際に行なわれるもの、即ち目的を達すべく用いられる特定の工夫・秘訣・術策を意味しており、種々のtechniqueは或る特定のmethod並びにapproachと調和一致していなければならない。(2)」このAnthonyの小論に述べられたapproach, method, techniqueの定義を、ここで問題となっているmethodに焦点を合わせて考えると、次のような問題点が起こる。まず、methodとapproachとの区分に関して、例えばOral ApproachとOral Methodとの相違はどこに求められるのか。また、methodとtechniqueとの区分に関して、指導過程のどこまでがmethodで、どこからがtechniqueと言えるのか。更に、彼がmethodの項で例示しているMim-MemやPattern Practiceは所謂Direct Methodなどと同位(同じレベル)と見なせ

るのか。

そこで、まず approach の面から検討すると、Fries は「Oral Approach は単一の method や一組の method 以上のものであり、それは第一に最初の段階で達成されるべき目標であり、第二に最初の段階で習得されるべき特別な一組の材料である。この目標と材料が method の或る特定な原理を要求する。(3)」と論述する。他方、Oral Method は Palmer によれば、「口頭・会話・自然的作業と定義づけられるようなもの以外の全てを排斥する言語学習の方法(4)」であり、彼は Oral Method をもって教授法の全体とは考えず、その中の必須な段階をなすもの、つまり目標に対する手段であると見なす。この二つの見解は両者共口頭(oral)を重視する点では類似が認められるが、前者が目標と材料の本質を示し method の原理を述べているのに対し、後者は言語材料を提示するための全般的な方法及び指導過程に関与している、と言う意味において Anthony の定義に矛盾しない。しかしながら、この正当化が他の全ての method にも適用するとは限らず、例えば Direct Method は、前述の Mackey も指摘した如く教材の内容・配列には触れず、一つの見地に基いた原理的な性格が強いことから、approach に近似したレベルに属すと考えられる。

次に、Anthony が method の範疇に分類した Mim-Mem と Pattern Practice は、一般に「何々 Method」と呼ばれているものに比較すると同じレベルでは扱いきれなくなって来る。そこで、method と technique を区別するのに、method とは「言語材料の指導過程全般を通じて、連続性を持って組織的に行なわれる方法原理」であるのに対し、technique は「その全体の材料の中の或る特定な事項を教えるために、或る一時的な過程において用いられる断片的な教授技術であり、それらの間の相関性は問題ではないが、method の方法原理には適合していなければならない。」と規定すれば、Mim-Mem と Pattern Practice は次の如く説明される。すなわち、それらを教授場面で或る事項を教えるための孤立的技術と見なした場合には technique に過ぎないが、Strain の小論(5)に現れている如く、その域を超越して或る連続性を有し、全般的な方法原理を示す場合には method 的色彩が濃厚になる。

さて、これまで approach, technique との比較において考察した method の分析から明らかになることは、method は本質的に多面性を有し、広範囲に渡るものであるから、便宜的に階層・レベルを設定することが不統一で混乱をきたしている状態を組織立てるのに有効になって来ると思われる。method の三段階は、(1) Direct Method のように approach に近い性格のもの、(2) Grammar-Translation Method など多数の中間の性格のもの、(3) Mim-Mem Method や Pattern Practice Method のように technique に近い性格のもの、と大別出来る。このような method の階層化から構成要素の分析に進むと、主要な三つの側面が浮かび上がる。つまり、(1) method の基盤としての言語学的・教育学的側面、(2) 言語材料の秩序正しい提示のための教材面、(3) その効果的適用のための教授場面、である。そして、この method の三段階と三つの側面を統合すると、そこから次のような method の意味規定が導き出されよう。

「method とは或る特定の言語学的・教育学的理論原理に基き、教材内容の選択・配列・提示の過程を規定し、実際の教授場面における適切な技術を伴う所の包括的概念である。」

このように結論づけられた method は、その前提基盤と適切な実施と同時に、言語教育が有す複雑な体系の他の種々の重要な要素への配慮が伴わない限り結実を見ない。それ故、そこから示唆される将来への方向は Pei の言葉を借りれば、「絶対的な意味において、言語を学ぶのに良

いmethodとか悪いmethod,あるいは正しいmethodとか誤ったmethodと言うようなものはない。唯だあるのは,あなた個人にとり,またあなたが習っていることを導き進めたい方向にとって,効果的なmethodとそうでないmethodだけである。(6)」と言えるのではなからうか。

注.(1) Mackey, W. F.: Language Teaching Analysis (Longmans, '65)

(2) Anthony, E. M.: "Approach, Method, and Technique" (ELT 17, 2, '63)

(3) Fries, C. C.: "On the Oral Approach" (ELEC講演集, 研究社, 昭和33年)

(4) Palmer, H. E.: The Oral Method of Teaching Languages (Heffer, '65)

(5) Strain, J. E.: "Drilling and Methodology" (LL 18, 3-4, '68)

(6) Pei, M. A.: How to Learn Languages and What Languages to Learn (New York, Harper & Row Ltd. '66)